

「ベルシャ人の手紙」と正義の問題

根岸 国孝

自己分析と正義

モンテスキューの「ベルシャ人の手紙」は一七二一年の初頭、コロニユのピエール・マルトール書店、実際にはアムステルダム・ジャック・デポルド書店で出版された。それは著者自身の伝えるように、「たちまち驚ろくべき売行きを示し、すべての本屋はその統篇を手に入れようとしてあらゆる手段を用いた。かれらは逢う人々の誰れ彼れを問わず袖を引き、『旦那、お願いです、ベルシャ人の手紙をこしらえて下さい』と云った。」（ベルシャ人の手紙、考^{レシヤノヒツ}察）ブレイヤード版「モンテスキュー全集」の序文でロジエ、カイヨワは本書が著者自身のために社会学的革命を果し、他の人々にも、これに習ってそれを遂行しうるようにさせたと考えている。こゝに社会学的革命という点にある。つまり、現在生活している社会に対し、他人を装おい、それを外部から、生れて初めて見たように考察する方法という点にある。つまり、フランス人がフランスをインデジャンかバプア族の社会を対象とするように考察し、自己の習慣や法律を自然的と考えるのを停止するのである。生れた時から慣れっこになっていて、それ以外にはありえないと思われるような

制度や慣習を異様なものと見なすだけの特製の構想力の所有者にして、はじめてこのような革命を行うことができるのである。

「このような作品が発表されることは、社会にとってまことに悪い前兆である。何となれば、社会の凝集力を維持しているあらゆる表明を差控えるべき事物を、その社会と関係が少なければ少ないほど完全に遂行しうる方法で、観念的に、その社会と絶縁することにはかならないからである。」これは彼の後輩の小説家よりも幾増倍の努力を必要とする仕事であった。客観的描写は、実は単にもっともらしければよいのであって、その描かれたものが、不条理・異様・滑稽であることは必ずしも必要でないから。それはまた現代社会学者もちゅうちよする仕事であろう。未開社会の性生活についての報告は汗牛充棟といえるが、ニューヨーク人のその報告はキンゼー博士をまたねばならなかったから。聖ザビエルの腕の干物もブラジル土人が乾し固めた捕虜の首ほどにグロテスクであるとは、ミッチーのマザーたちは感じなかったからである。ところがモンテスキューは、宗教裁判所がユダヤ人の火刑をやめない限り、「日本皇帝（つまり徳川将軍で、天皇は当時神主にすぎなかった）がその領土内のすべてのキリスト教徒を弱火でこんがり焼いたことの不当を鳴らす」のは無意味であるという、公平、冷静な科学者の立場（法の精神、第廿五篇、十三章）に立っていたのである。

このように他人の眼で自己を見る相対主義は、ファナチズム、独善主義を防止するが、また、病的にまで非情な心を必要とする。ことに、あらゆる角度から、さまざまの眼で自己を見る「ベルシャ人の手紙」は非人間的な、デレック・タンチスム、懐疑論におちいる恐れなしとしない。ク・セ・ジュのモンテーニュと同郷のモンテスキューは、彼の先

輩と同様、観念の遊戯を楽しむくせがないでもない。彼のこの性向が、彼をキケロの愛読者としたのであった。「神の性質において、キケロがすべての教派を検討し、すべての哲学者を打破り、各偏見に何らかの烙印を押すのを見るのは、なんと楽しいことであろうか。彼がこれらの怪物と闘っているかと思うと、哲学をもてあそんでいたりする。彼が紹介する選手たちは、頼まれもせぬのに滅ぼし合う。甲が乙にやられれば、次は乙がやられる番になる。これらすべての大系は互に敵手の前に消滅し、読者の頭の中には哲学者どもに対する輕蔑と批評家キケロに対する賞讃が残るのみである。」こゝに止まったならばモンテスキューはアンリ・ペイル以上の者とならなかつたであろう。ペイルの辞典はキケロの方法に従つて教義を破壊した。百科全書家はペイルに従つて国王と教会の權威を破壊した。若きモンテスキューもペイルやヴォルテールに劣らず破壊的であつた。しかしペイルもヴォルテールも、この方法を用いて、憎むべき、破壊すべきものを、笑うべき、非合理なものとして露呈するだけであつたのに対し、モンテスキューはこの方法を極めて生産的なものに応用したのである。すなわち、思弁的、形而上学の問題にのみ、この方法を用いる限り、デレタタチスム、懷疑論とならざるをえないであろう。だが、事実それも社会的事実、社会的類型を対象とした場合には、この方法は極めて多産的でありうる。たとえば、観念のかわりに事実を列挙すれば、そこに若干の類型がえられるであろう。類型がいくつか与えられれば、規則が見られるであろう。規則には例外がある。ところが、モンテスキューに見られるほどの好奇心がこの異常を追求すれば、例外には例外を説明する別の規則があり、それは一般的規則を否定するものではなく、逆に、規則に対する説明不足を補うものであることを知るであろう。かくして原則と例外を説明する法則がえられる。「ペルシャ人の手紙」から「法の精神」に至るモンテスキューの發展は、

いわば彼の異常、例外に対する好奇心がもたらした比較的方法の成果と云って差支えない。

他方、他人の目で自己を見る、他人の立場に身を置いて物を考えるということ、功利主義理論の展開に必要であるのみならず、その前提条件ともいえる。したがってそのような能力を具えた作者の出現は資本主義社会が要求するところであった。流通の正義が等価交換の関係であり、配分の正義が構成員の社会的機能とその報酬の関係であるとすれば、正義の問題はある意味で算術、幾何学の問題であり、自他の利益に対する好悪の情を完全に停止し、質的差異をなるべく量的差異に還元しなければ、精密に計算することは不可能だからである。ブルジョア階級の興隆にはこのような功利主義的正義を必要とする。資本主義的企業は他人の資金を集めて利潤を分配する大規模な、永続的な組織であるから、それは腰ダメの山分けではなく、経営経済学的精密さをもった相互扶助の組織でなければならぬ。こうした組織に適合するような道徳が、功利主義なのであって、利益を平等に分配し、損失を均分する社会道徳の健全な発達のない所には、会社や相互保険を普及させるのは骨が折れる。十八世紀の文学は相互扶助を強調しているが、それは持てる者が持たざる者を助けろという慈善ではなく、有無相通ずる交換、結社による個人的利益の増進を唱える相互主義、ギウ・アンド・テイクの理論である。モンテスキューの友人サン・ピエール神父は「永久平和論」を唱えて戦争絶滅を考えたが、それはキリスト教的友愛精神を基調とするものではなく、君主たちを会員とする相互保険の理論であった。モンテスキューの道徳も神父のそれと基調は同じである。「ペルシャ人の手紙」は自己分析、社会分析、正義の追求が中心となり、この三者は切離すことができない。モンテスキューは死ぬまで正義を追求した、正義に取りつかれていたと云ってもよい。「リジマック」はその結論と見てもよい。「ペルシャ人」において彼はこの問

題と如何に取組んだか、これが本論文の課題である。

シナ服を脱いだ黄氏

「ベルシャヤ人の手紙」はモンテスキューの若い時代の巴里滞在、すなわち一七〇九年—一七二〇年の十一年間における所産であつて、多分に自序伝的要素を持った作品である。したがつて、ベルシャヤ人が・ヨーロッパという全くちがった世界に移されて、はじめはもっぱら好奇と驚異による赤毛布ぶりを發揮し、還境に慣れるにしたがい、次第に、觀察が科学的に、批判的になつて行く順序は、田舎から都に出た青年モンテスキューがお国言葉を笑われながら次第に巴里生活になじんで行く過程と共通する。しかし地方人もフランス人である以上、その巴里批判は全然他人の目を通じたものにはならない。それでボルドーの青年から異邦人へと飛躍するのであるが、アンドレ・マッソン氏の説によれば、モンテスキューからユスベクへの変ぼうには、中間に黄氏が介在したのであつた。

ベルシャヤ人のフィクションは、マラナの「トルコ密偵」その他の文芸作品から暗示されたということもありえよう。だが、ベルシャヤ人の原型は、モンテスキューが訪れた國際的社會の中から求められたと考える方が、自然であろう。Geographica には「Hoange 氏との會話から引出した、シナについての若干の省察」と題して、祖先崇拜の研究、シナ文字の構成の分析、考試の描写等が行われている。その日付により、モンテスキューがシナ問題に関心を示しはじめたのは、「法の精神」よりははるかに以前で、少なくとも一七一三年、「ベルシャヤ人の手紙」を書き出したころだということも明らかとなつた。

ところで Hoange 氏とは誰であり、いかなる機会にモンテスキューは彼と会ったのであるか。考証によると、Hoange 氏は福建省生れの青年で、一七〇三年、フランス宣教師の申出に応じて故国を離れ、フランス王室図書館にシナ語の翻譯者として勤務していた。彼以前に欧州を訪れた東洋人はないこともないが、モンテスキューのベルシャ人のように向学心に燃え、西洋文明に引かれた東洋人としては最初の人であり、ユスベクと同様に、巴里の諸図書館の常連であった。(手紙の一三三、一三四、一三五、一三六)

国王の政府は彼の住居、食料、衣服の面倒も見てくれたらしく、一七一二年の終りか、一三年のはじめに、お仕着せをたまわり、このシナ人は「マンダリン風あるいはシナ式の三着の衣装」をぬぎすてて、「金のししゅうのしてある上衣」をまとったのであるが、これは巴里子の好奇心を免かれるためにリカが「ベルシャ衣装をすてて、ヨーロッパ式の衣装をつけた」のと、時期的に完全に一致する。この Hoange 氏にモンテスキューを紹介したのは、有名な東洋学者 Fréret 氏か、Desmaret 神父で、モンテスキューは Grenégand 街にあるシナ人のさゝやかな部屋を訪れたのである。黄氏(ホウ)(当然 Hoang と綴るべきであろうが、彼自身の違筆な署名も、Hoange となっているそうであるし、Geographica に Spiohiège に Hoange と綴ってある。)は、いかにも西洋文明の吸収に熱心な東洋人らしく、ある意味で西洋人以上に西洋人であった。すなわち、細君を非常にいたわり、料理や裁縫も彼ひとりで行っていたそうである。Spiohiège には、はじめてフランスに着いた時のこの東洋人の印象が記されている。彼は恐らく聖心のマザーみたいな宣教師から、シナは偶像を崇拜し、妻をドレイ視する悪い国である、これに反し、西洋では主食が配給の時にも進駐軍物資を教会が信者に分配し、隣人愛に富んだ外国の資金でヨシダが地獄をエデンの園にしたとか、有難い話ばか

りを福建の田舎で聞かされていた。だから黄氏はアメリカにはギャングがいないと信じていた。それでもモンテスキューは「黄氏から聞いたところによると、はじめてシナからやって来た時、ヨーロッパでは習俗がきわめて純良で、非常に大きな隣人愛があって、盗みだとか死刑執行などということは、いまだかつて聞いたことがないと、かねがねシナでいわれていたものですから、教会に帽子をうっかり忘れて行きました。ところが教会から出たところで、人殺しを処刑しようという話を聞いて全くびっくりいたしました、という話である」と述べている。原文で僅か八行のこの記述は、「ベルシャ人の手紙」の喜劇味を殆んど全部伝えていないであろうか。

第一。他人の目で見るということは、読者からは冷酷な不当なと感じられるかも知れないが、見る人からいうと見られる物に、まづ憧憬し、驚ろき、失望してはじめて、そういう目が持てるのである。官費で洋モクを拾うための代議士の洋行からは赤毛布珍談記は生れても、「ベルシャ人の手紙」は出てこない。他人の目は宣教師の話から作られた西洋のイマージュと現実におどろいた黄氏の目であって、これをモンテスキューは彼との交遊において学び取ったのであろう。

第二。「ベルシャ人の手紙」の主人公はユスベクと考えるのは正確ではない。リカがその分身であり、両者は一体である。やゝ軽薄で西洋文化に溶け込もうとするリカは、異質の文化にあこがれる黄氏であり、重厚で瞑想的なユスベクは四千年の伝統を身につけた黄氏である。フランス王室の金モールのお仕着せを身につけて、東洋的な空とぼけた話をする黄氏に会った時、モンテスキューはリカとユスベクを発見した。それは巴里子になりつゝある自己と、ポルドー貴族としての自己であった。彼はこの二つの自己を描きわけて見ようと思つたのである。

第三。それではモンテスキューは何故「シナ人の手紙」を書かなかったのであるか。それは、とアンドレ・マッソン氏は云う。「彼がハーレムの事件をそこに導入することを固執したのと、シナの一夫多妻制の家族的性格が情事の描写に不向きであったからである。」それよりも筆者は、「ペルシャ人の手紙」はブルジョア的功利主義の立場から王権と教権を批判する書物でキリスト教と専制主義の攻撃に都合のよい回教社会を選んだのだと考える。キリストという嘘つきがと書けば命がなくなるけれども、マホメットという詐偽師はと云っても縛られない。それにシナの専制政治の下では、当時の宣教師たちの報告により、善政が行われていて、儒教のおかげで風俗はじゅんぼくだと信じられていたから、こういう一般的印象を先づ否定する仕事をやらなければ、批判、攻撃を行うことができない。それで黄氏のシナ服を借りるかわりに、モンテスキューは回教服を着たのであろう。

アルセスト西へ行く

モリエールの「世間ざらい」の主人公アルセストは、ヨーロッパの虚飾にみちた社会をのがれて人なき里へ行く。ペルシャの専制政からのがれてユスベクはヨーロッパに行く。手紙の八にしろされた彼の心境はアルセストに非常によく似ている。

「私は幼少の頃より宮廷に出た。しかし私の心はそこで少しも腐敗しなかった。私は大きな計画を抱きさえもした。つまり、私はあえてそこで有徳であろうとしたのであるということが出来る。私は悪徳を知るや否や、それから遠ざかった。だが次には、その仮面をはぐためにそれに近づいた。私は徳行を玉座の下にまで持っていった。私はそこ

ではその時まで知られていなかった言葉を使った。私は巧言令色に度を失わせ、偶像崇拜者たちと偶像とを同時に驚倒させた。……その結果は明らかである。ユスベクは生命の危険を感じて国を脱出せざるをえなくなる。この打明け話で見限り、ユスベクはアルセストとよく似てはいるが、アルセストよりも正義小児病患者である。大貴族で礼儀正しいアルセストは共産党のピラをはるだけの目的で大学を飛出した哲学者のように頭の単純すぎる男ではない。極めて真面目であるがために、嘘がつけないだけなのである。それはともかく、ユスベクが正義愛好者であることは確かであり、この立場からヨーロッパ文明を容謝なく批判する。ところでこのユスベクがモンテスキューの代弁者だとすると、それではユスベクと若きモンテスキューの関係はどうかという問題が生ずる。

もちろん、彼自身がユスベクのモデルの少なくとも一つであった。彼は自から選んだ、かなり風変わりな生活様式を周囲に認めさせるためには相当苦勞した。大地主兼領主であり、高等法院の職場が輝やかしい未来を約束している時に、そのすべてを捨てて、学問のためと称すると同時に快樂のために長い巴里生活を送ることに対しては、多分に豊凶のあるブドウ園主、国際関係に左右されるブドウ酒輸出業者（彼自身がその何れでもあった）の集まっているボルドーの社会には批判がきびしかった。その批判に答えるために、彼は「大きな計画を抱きさえた」のである。ところが敵はふえる一方であった。そこで「私は学問に対する非常な愛着をよそおった。そして、それをよそおった結果、ほんとうに私は学問に愛着してしまった。私はもはや、どんな事業にも関係しなくなった。そして、別荘に引こもったのである。」この別荘がラ・ブレードの美しい城である。「だが、この決意にも色々不便があった。私は依然として私の敵どもの悪意にさらされていたのであった。しかも、殆んどそれから自らを守る手段が奪われていたのである。」だ

が、それは生命の危険を感じさせるほどのものであつたらうか。さすがにモンテスキューもそうは云わない。直訳すると「若干のひそかな忠告が私をして私自身について真剣に考えさせた」というどうにも解釈できる表現を用いて、その直後、「私は私の祖国（つまり故郷）から亡命しよう」と決意した」と述べ、国王の（家族のまたは高等法院の）許可を得て、学問研究を口実に、ポルドー社交会と高等法院に作った敵から逃れるために故郷を去つたのである。「以上がルスタンよ、私の旅行の真の動機である。」つまり一七〇九年から一七二〇年の最初の巴里滞在は手紙の八を百パーセントのモンテスキューの自序伝と解する限り、正義感が引起したノイローゼが原因だということになる。したがって「ベルシャ人の手紙」は好色本のようなものではあるが、正義の問題の追求が重大要素となつていたのである。

ユスベクの正義論

我々の観念は我々の感覚が事物の間に定め、感覚によつて我々に示されるところの諸關係から生ずる。だから道徳的観念も同様の起源をもち、それ故、すべて相対的なものではなからうか。これが手紙の十七の提出する問題であり、道徳の全大系をくつがえしかねない問題である。

だがユスベクはこれをもつぱら浄、不浄の問題として聖なるメエメット・アリに質問する。「わが立法者（マホメット）が豚肉、その他、彼がけがれたと呼ぶあらゆる肉を我々に禁じているのは何故であるか。」「神聖なる博士モラフよ感覚だけが事物の浄、不浄の判定者でなければならぬ。だが、事物は人々を一樣に感じさせはしないし、ある人々に心地よい感覚を起させるものが、他の人々には不愉快な感覚を生ぜしめるのであるから、各人は勝手気儘に自分に関

しては浄なるものと不浄なるものとを区別しようというのでない限り、感覚器官の証言はこの場合、規範になりえないということになる。」

この質問に対し「予言者たちの下僕」は手紙の十八で曰く、豚といふけだものはノアの箱舟の中で象がたれた糞の中から生れたのだから不浄なのじゃ。「おまえたち俗物はまだ天書を読んでおらん。天書のうちでおまえらに啓示されたもの（聖書）も天の図書館の一小部分にすぎん。だから、わしどものようにシャバにいますうちから天に近づいてゐる者でさえ、暗がりと闇の中にいるのじゃ。」

ビエール・バリエールはこの返答をモンテスキュー自身の意見と早合点して、モンテスキューはこの異議（道徳は相対的だという）におののいて、「人間の無知が我々に理解することをさまたげている一つの真理がある。だから我々はその不明瞭にも拘らず、それを受入れなければならない。すなわち、道徳は、我々の外にあるのだと、彼は云うのである。」(P. Barrière: Montesquieu, Edition Delmas, Bordeaux, 1946, p. 333)と解釈しているが、文学の読み方には色々あるものだと感心させられる。この手紙は聖書や聖伝を盾にとって天下りの教儀を押しつける啓示神学を愚弄しているのであつて、それに頭を下げてゐるのではない。手紙の一〇のミルザは何といつてゐるか。「私は博士たちに話したのだが、奴らは例によつてコーランの文句をならべるだけで、私を絶望させた。なぜかといつて、私は奴らに、善男善女として話してゐるのではなく、人間として、市民として、家長として話してゐるのだから。」このミルザの意見がモンテスキューの意見なのである。

だからといつてモンテスキューは感覺論による道徳の相対性を支持するものではなく、道徳は神からすべての人間

に与えられた内的原理だと考えている。彼の孫に対し、「私はあなたに道德の掟を与えようと思っていた。しかしあなたがそれ（道德）を心の中に持っていないならば、それを書物の中に見出しはしないであろう。

我々を導くものは決して我々の精神ではなく我々の魂なのである。」（*Pensées*, 72; III, 2170.）と教えているが、道德感情はそれが全能の神より与えられたものではあるが、神自身も左右することのできない一種の法であり、客観的な、数学的正確さを具えている。手紙の八十三でユスベクは述べている。「正義とは適合の割合であって、それは二物の間に現実に存在している。それを考察する者が如何なる存在であろうと、それが神であれ、天使であれ、または人間であっても、この割合は常に同一である。」そして人間社会の成立以前にもすでに存在している。「法の精神」はこの問題について次のように述べている。「知的存在物がまだこの世に現れぬ前にも、これらの存在物は可能であった。だから可能な関係をもっていたし、その結果、可能な法を持っていたのである。作られた法がまだ存在しないうちにも、正義の可能的関係が存在していた。制定法が命令し、または禁止すること以外には、如何なる正なるものも不正なるものもないというのは、まだ円が画かれぬうちには、すべての半徑は相等しくなかったというのと同じである。」（第一篇、第一章）

手紙の八十三はさらに、この内的原理はすべての人に共通に与えられているという。「我々は我々よりも強い人々に取巻かれている。かれらは無数の異ったやり口で我々を傷けることができ、多くの場合、そうしても罰せられずにすむ。これらすべての人々の心の中に、我々のために戦ってくれて、かれらの侵害の外に我々を置いてくれる内的原理があるということを知るのは我々にとって何と安心なことか。」

それでは我々には正義の關係が常に見えてゐるか。また、見えてゐるとしても、その命令に従つてゐるか。「人間は必ずしも常にこれ等の關係を見てゐないことは事實である。それ等を見てゐる場合にも、それから遠ざかることさえしばしばである。しかも彼等の利益が彼等にとって一番よく見えるものなのである。正義はその声を張り上げるのだが、情念の喧騒の中で耳に入りにくいのである。」(同前)「法の精神」ではこう云つてゐる。「肉体的存在としての人間は、他の物体と同じく、不易の法によって支配されている。知的存在としては、絶えず神の立てたもうた法を犯しており、自ら制定する法をも改変してゐる。自から行動すべきものであるにもかゝらず、限定された存在であるから、すべての有限的な知的存在と同様に、無知と誤謬に陥りがちである。その持つてゐる貧弱な知識も、感性的被造物として、失うのであり、無数の情念に迷いがちである。」(第一篇、第一章)

だから我々に不正を行わせるものは、無知と誤謬でなければ、それは利害關係である。「人間は不正義を行うことがある。それを犯すことに利益をもち、他人の満足よりも自分自身の満足をえらぶからである。人間は常に反省しながら行動する、すなわち、いかなる人も動機なしに悪人にならぬ。決意させるには、ある理由がなければならない。そしてこの理由が常に利害の理由なのである。」(手紙の八十三)

こう云つてもモンテスキューは利益の追求を否定して禁欲主義に陥るような非合理主義者でないと同時に、邪惡な欲望をしりぞけるために自然に帰れと叫びもしない。たしかに彼はルソウのように人類の原始時代における「習俗の簡素さ」や「自然の素朴さ」したがって徳性を認めてはゐるが、(Pensées, 589: 11, 1607)人間が動物に近づくほど善良になると考えるほど、非現実的な男ではない。手紙の一〇五で、學問と文明の発達は人間を不幸にしたかという問

題をレヂが提出したのに対し、手紙の一〇六には、それに対するユスベクの反論がある。怠惰はすべての悪徳の源であるが、文明が進めば、各人は自己の利益の追求のために勤勉にならざるをえない。各人が飢をしのぐだけの農業を行うとすれば、現在の人口の廿分の一しか生存できないであろう。したがって各人が自己の利益を追求しその結果、全員の幸福が増進することが道徳の目的であるという功利主義がモンテスキューの道徳論の基調なのである。それは文明進歩の結果、原爆のような破壊的兵器が発明されたらどうなるか。それほど驚ろくに当らない。「もしも破壊的な発明がたまたま発見されるとしても、間もなく国際法によって禁止されるであろうし、諸国民の全員一致の合意がこんな発見を葬りさるであろう」と考えたのは達見であるが、それについて、「このような手段で征服を行うのは、君主の利益にならない。彼等は臣民を求めるはずで、土地を求めるはずではないから」と考えたのは余りに合理主義的に割り切っている。

ともかく、快樂を求め利益を追求することは人間の自然である。たゞ個別的利益の追求が不正を行わせる原因になる。ところが神は自己の個別的利益を求めることはありえないから、神が不正を行うことはありえないという結論ができる。「神はいかなる不正をも決して行うことはありえない。彼に正義が見えたと人が想定するやいなや、彼は正義に従うものと必然的に考えなければならぬ。なぜかという、彼は何物にも事欠かず、自己充足するのであるから、(不正を行うとすれば)、利害なしに悪を行うことになるから、あらゆる存在の中で最も悪いものということになるから。」(手紙の八十三)

さらにもし、神が存在しないと仮定しても、我々は正義に従はざるをえない。「神がたとえ存在しないとしても、我

々はやはり正義を愛さざるをえない。つまり我々がそれに対して極めて美しい観念を抱いている存在物、もし存在すれば必然的に正しくあるであろう存在物に似るための我々の努力を行わざるをえない。我々が宗教のきずなから自由になろうとも、公正のきずなから自由になるはずはないであろう。」(同前) モンテスキューは若い時はシニークで、年をとってからストイックになったという説は誤りである。「リジマック」の正義論はすでに「ペルシャ人」の中に
出ているのである。

最後に、わが正義のユスベクは叫ぶ、「人間が自己を検討してみても、正しい心をもっていることが解れば、彼にとって何という満足がえられることか。この快楽は、どんな厳格な人をも、有頂天にさせざるをえない。彼は自分が虎や熊以上のものだと思解ると同じ程度に、正しい心を持たぬ者よりも自己の存在が上にあると思解る。そうだ、レヂよもしも私が眼の前に行っているこの公正を絶えず、不可漫に従っていると確実しうるとすれば、私は自分を人間の中の第一のものと信ずるであろう。」(同前) ペルシャ服を着たアルセストは果して不可漫的に正義に従っていたであろうか。

ユスベクのハーレム論

わがユスベクは前述の通り正義の士であるが、また、なかなかの学者で、古今東西の制度に通じていることモンテスキューみたいな男である。彼は回教的偏見にとらわれていない。すなわち、キリスト教徒は邪宗門であるから天国へ行けないのは当然であるが、彼等は古代の偶像崇拜者のように真理を知らされていないのだから、地獄へ陥るのが

当然と考えるべきではない。さらに彼等の宗教の中には回教の教義の萌芽ともいうべきものが見うけられさえもする。いづれかの日に、彼等も尊い真理の光に目覚めることもあらうと、異端者に対し寛容である。(手紙の三十五)

そればかりか、彼はコーランの教も盲目的に受取りはしない。「聖なるコーランによって許容された一夫多妻と、彼女らを満足させようという同書の中で与えられた命令ほどに矛盾しているものは何もない」と勇ましくも云い切るだけの見識の持主である。(手紙の百十四)

ユスベクがレデに与えた手紙の百十四は社会学者ユスベクがハーレム制度を批判したものである。予言者モハメットは「汝の妻たちに会え、汝は彼女たちにとり衣服のように必要であり、彼女たちは汝に衣服のように必要であるから」とおおせられたが、この掟に忠実な回教徒は聖なる法によって定められた四人の妻の衣服となるため、弱小球団のピッチャーのように連投の結果、肩だかどだかが使えなくなり、やがて「自らのトロフィーの下に埋葬される」であらうとユスベクは考える。

男女の道も自然に従わなければならぬ。「自然は常にゆっくりと、いわば、節約しながら行動する。その作用は決して暴々しいものではない。その生産においてさえ、自然は節度を求める。規律と節度を持たずには決して進まない。むりに自然を馭り立てると、自然は間もなく沈滞におちいり、残された全力を自己保守に用い、その生産的功德、生殖力を全然なくしてしまふ。」だから「非常に大きなハーレムには極めて僅かの子供しか生れず。それも、たいいていの場合、虚弱で、父親の衰弱の影響をとどめている。」一夫多妻は亭主にとっても、子供にとっても望ましいことではない。

「それだけではない。」この制度は社会にも大きな損失をもたらす。妻妾を監視するためには、チョン切られた男奴隷と、一生未婚で暮すことを余儀なくされる女奴隷が多数必要となる。「その結果、どれほどの人口減少が生ずるはずではなからうか。」

「以上のように、たゞ一人の男性が、自己の快樂のために男女両性の多数の家来をやとい、これを国家にとっては死者と変らぬ者にし、種族の繁殖のためには無益なものとしているのである。」これは明らかに正義に反する。

これほどにハーレム問題に公正な見識を示しているにもかかわらず、ユスベクは彼自身のハーレムを解放しようとは全然考えなかった。こゝにベルシャ人の悲劇が生ずる。正義に従うということは、また難いかな。

リカの奴隷論と婦人論

A 奴隷の害について

正義のために亡命しなければならなかったユスベクにも、その大官としての面子があろう。だが、彼と一緒に西洋に来て、西洋にとけこもうとするリカには、偏見は少ないはずである。我々は、ハーレムと、それが要とする奴隷制に対するリカの意見を聞いてみようと思う。

ユスベクと一緒にヨーロッパに旅立ったリカはベルシャ婦人とフランス女とを比較した手紙の三十四で、ベルシャ女はフランス女性よりも美しいが、後者の方が奇麗であるというような事を述べた後に、アジア人の鹿爪らしさの原

因を追求する。なぜなら、ベルシャドころではなくトルコではそれが「さらにひどい。こゝでは王朝の創始以来、子々孫々、いまだ笑った人のない家庭を見出しうるであろう」からである。だがリカの解釈は皮相的であった。トルコ人やソビエット人の「無表情は相互の間に交際の少ないことから生ずる」と考えたのだが、その事自体が専制すなわち奴隸制の結果なのである。ある日、この問題について、フランス人と話をした時、相手はこう云った。「あなた方回教徒の習俗のうちで私を最も傷けることは、あなた方が奴隸と一緒に生活することを余儀なくされていることです。彼等の心も精神も常に彼等の身分の卑しさの影響をうけています。この卑怯な人々は、あなた方の中にある自然から与えられる徳行の諸感情を弱めます。そしてこの連中があなた方につきまとう幼年時代から、これ等の感情を破壊します。だから偏見から脱却しなさい。」あなた方の子供の教育について、勤務評定によって「奴隸化された教師から何を期待できるか。」チンボのない奴は「弱者（こゝでは女性）をしいたげることができる限り、強者（こゝではハーレムのおんどり）に虐待されることに同意するのである。」結局、奴隸所有者の立場からも、奴隸制度は有益な存在ではないと考えられたのである。

B 山の神さまにひいて

ぶてば引かくし、蹴飛ばせばわめく、殺すと夜中に化けて出る、レジスタンスの家元、女房を東洋人たるリカはどのように取扱うべきだと考えたであろうか。彼が手紙の三十八で「女性から自由を奪うのと、彼女らにそれを残しておくのとどちらが都合がよいかということは男性の間では、重大な問題となっている」と述べ、「そのどちらにも

「とてもな理由がどっさりある」と考えるのは、もったものである。男性の功利的立場からだけでは女房も疊も敷物であつて、新らしいほどよいのであるが、「自然法が女性を男性に従属させているかどうか」ということは、それと別問題である。」それでリカは、イキな哲学者に質問したのだが、その答えはシャレすぎていふから省略するとして、女性が男性に従属しているということは「我々が強者であるからなのか。そうだとすれば、これこそ本当の不正義である。我々男性は女性の勇気をくじくためにあらゆる手段を講じた。もしも、教育が平等ならば、力は対等となるであろう。教育によって弱められていない才能において、それを試してみよ。そうすれば男性の方が強いかどうか解るであろう。」これを読めばボーボワールの「第二の性」など買う必要はない。条件が同じならば、男女の能力はほぼ平等である。

その上、歴史を按じて見ると(どうも余り正確な歴史ではなさそうであるが)文明国は何れもかかあ天下であつた。「たとえ我々回教徒の習俗に反するとはいへ、打明けていなければならぬことは、最も文化のすぐれた国々では、妻は常に夫に対して権力をもつていた。その権力は法によって、エジプトではイシス神を尊び、バビロニアではセミラミス神をあがめて、定められていた。人々はローマ人のことを、彼等はあらゆる国民に命令していたが、女房には服従していたといつていた。」女ならでは夜の明けぬ国は四等国ではないのである。

このような議論と、「御婦人用ハーレム」論を見ると、「ベルシャヤ人の手紙」が、人気を博した理由がわかる。「ベルシャヤ人」は婦人解放論では啓蒙哲学の中で一番左翼である。文学愛好者の半数は「サロン」を支配していた御婦人であるということを考えて見よ。それではわがモンテスキューはそのようにフェミニストであつたか。彼は後に「ベル

「シャ人」を若気のいたりの作品だと云い、娘を見貴のせがれと結婚させて、モンテスキュー家の名と、その財産の散逸をふせいだ。あゝ、正義を実行することは何と難いかな。

モンテスキューの奴隸論と婦人論

一 奴隸制について

奴隸制についてのモンテスキューの意見としては「法の精神」第十五篇、第五章「黒人の奴隸制について」が最も有名ではあるが、彼の説を最も単的に示しているのは *Pensees* (1935. I. 174) である。

始めに彼はいう「奴隸制は自然権に反する。自然権によりすべての人間は自由平等なものとして生れているのだ。」したがって、「自然権に反しない従属関係は二種類しかない。」子供の父親に対するそれと市民の執政者に対するそれである。

「(奴隸の) 主人の権利については、それは決して適法ではない。決して適法の原因をもったことがありえないからである。」と述べ、後に「法の精神」中に「奴隸制の権利の起原について」の議論の原型を示し、身売り、戦争、出生が、奴隸所有の権利の原因になりえなかつた事を示し「だから奴隸は自由になりうる。彼には逃亡することが許されている。彼は社会に属していないから、(社会契約と関係がないから) 市民法は彼に関係がない。市民法が、鉄鎧を作っても無駄である。自然法はそれらを絶えず打ち切るであろう。……スパルタクスの戦争は、今まで企てられたものの中で最も正当なものであった。侵犯しても罪にならないような法を作る奴らに不幸が来らんことを。」こういう

う時のモンテスキューは「社会契約論」のルソーと全く同一人物の如くである。

二 婦人の隷属制について

学者というものは時々つまらない事に感心するものであって、モンテスキューは「アムステルダムで竜の血（麒麟血）と呼ばれるゴム液を出す木が、雌木のそばにある時には腿ほどに太く、一本だけの時には腕ほどにも太くないのを見てから、結婚は必要なことだと結論した」(Pensées, 1924, II, 801)だが腿ほど太い道鏡みたいな人にとっても、一夫多妻制はよくない制度である、なぜかというところ「一夫多妻制は父と母とが子供達に対して同一の愛情を持たぬという点で不合理である。母が二人の子を愛するように父が五十人の子を愛することは不可能であるから。」(Pensées, 1929, I, 60)

婦人の隷属制は、正当な根拠が見出せないが、これはいかにして生じたか。これは政治的奴隷制と共に始まったものである。「原始時代には、男性はその子供達に対すると同じ支配権を彼等の妻に対して行ったということは見出されない。それどころか、最初の婚姻関係は完全な平等と、自然的であると同一程度に愛情のこもった結合という観念を我々に与える。専制的国家と共に婦人の奴隷制が成立したに過ぎない。君主たちは、いつでも不正なものであるが、こいつらがまづ女性を犯し始めた。そして、親分のやる事は何でも真似をしたいという乾児どもを見出したのである。自由な諸国においては、このような不均衡が見出されたことはなかった。」「法の精神」に挙げられている、市民的奴隷制、家族的（女性の）奴隷制は、結局、政治的奴隷制つまり天皇制を基礎としているというのが Pensées におけるモンテスキューの主張である。

「法の精神」には、婦人の隷属性をはっきりと「家内奴隸制の法」と述べて、政治的、市民的（社会的）奴隸制と並立させている。そしてそれが「如何に風土の性質と関係するか」（第十六篇）というように、暑い地方では早熟のため女性が早く性的魅力を失うこと（第二章）、暑い地方では妻妾の扶養費が少なくて済むこと（第三章）、土地によって男女の比率が必ずしも一対一でないこと（第四章）により、風土的理由により一夫多妻または多夫一妻制が生じる物理的な理由を認めはするが「それは単に多妻制または多夫制が或る国々では他の国々よりも自然に反することが少ないという意味にすぎない。」（第四章）「以上すべてにおいて私はこれらの慣行を是認するのではなく、その理由を述べるのである。」（同前）というように、このような制度は事物の自然（Nature des choses）によって弁護される余地はあつても、人間の自然（Nature humaine）によって否定し去られねばならないのである。

去勢鶏きんまりどりの歌

去勢シヤボン鶏はうまいとは、食う人の云うことで食われる身には少しもうまくなく、仏徒は悪の根源をマラと呼ぶが、それを失つても決して煩惱はなくなるならぬそうである。手紙の九は不幸な宦奴の告白である。

去勢奴生活五十年の間、「私は一日の朗らかな日も、一刻の穏な時を持ったこともない。」「私自身と永久に別れさせられた時には、煩惱を犠牲にして休息と財産が得られると期待していたのだが、それは大変な間違いであった。

「私の中の煩惱の結果を消してもその原因は消してない」ので、煩惱から解脱できるどころか、ハーレムの光景を目にして失つたものの尊さをます／＼痛切に感じるばかりであり、それにもまして一人の幸福な男性の独占資本的横暴

を憤らずにはいられた。なかった。

女の一人を風呂に入れたある日の事、非常な興奮の余り、全く理性を失い、「或る恐るべき場所」に手を出した。これは万死に値する罪である。幸にして女は罰を免かれさせてくれたが、その代り、その後、完全に彼女に対する權威を失い、彼女の為に何回も万死を賭する冒険をやらされたのであった。

青春の火が身体から消えうせてからは、ある意味で男性に戻った。他人の為に女たちの番をしているのではあるが、服従させる快樂がひそかな快樂を与え、ハーレムにいることが小帝国に君臨するような気持ちにさせるのである。その代り、女達の復讐には恐るべきものがある。その最も手硬いのは、彼女たちが個々に持つ主人との十五分間である。「私の云分が全く通らない十五分間、主人が何も拒ばない十五分間、いつでも私が悪い十五分間。」この欠席裁判の十五分間の結果、「夕べに君思に感じ、晨に不興に泣いた事が何回あったかわからない。」ベッドの上の折衝と嘆息の作った条約の犠牲とされるのである。

それでは、正義の人ユスベク自身はこれら哀れな去勢奴をどのように考えているか。彼の妻の一人がその部屋に白人去勢奴を入れた問題で、すでにチョン切られているその奴隷の首までチョン切るだけでは足らず、白人去勢奴の長に与えた手紙の二十一に端的にそれが示されている。「ところで貴様は誰であるというのだ。このおれが勝手にこわすことの出来る下等な道具にすぎない。服従することを知っているかぎり存在するにすぎず、私の法の下に生きるか、私の命令一下死ぬためにこの世にいるにすぎぬ。私の幸福、私の恋や、さては私の嫉妬が貴様の下劣さを必要とするだけ息をする事が出来るにすぎない。つまり、貴様は服従以外の分け前をもったり、このおれの意志以外の魂を

もったり、おれの幸福以外の希望をもち得ない存在なのだ。」「天にまします予言者たちにかけて、すべての者のうちで最も偉大なるハリにかけて、私は誓う。若しも貴様がその義務から逸脱すれば、貴様の命を足許にいる虫けらの命のようにみなすであらう。」と。自分を正義の士と信じながら、黒人を人間と認めることの出来ないアメリカ人ユスベク。僅かばかりの貴族の特権のために、次第に反動的になるモンテスキュー。だが正義は彼を決して手離さないのだ。

ハーレム統治論

ハーレムには雪解けは禁物である。ポーランドやハンガリーの事件を起したくないならばスターリン主義を厳守するよりほかはないと去勢奴の長はユスベクに進言する。これが手紙の六十四である。

ユスベクのハーレムは今や無政府状態になろうとしている。この無秩序の原因は「すべて貴方の心と、妻達に示す優しい眼差しの中にある。もし貴方が私の手をおさえず、私に忠告の途のかわりに、所罰の途を残されるとすれば、彼女らの訴えとその涙にまろめこまれず、彼女たちを私の前で泣きに行かせなされるとすれば、私は決して甘い男ではありませんから、間もなく彼女達を調教してつけるべきくびきに従わせ、その横着な独立的な性質を倦み疲れて改めるようにしまししょう。」眼尻を下げず、鼻の下を短くし、警職法を改正して、去勢奴の長にベリヤが持っていた権限を与えなければユスベクの幸福は保たれないというのである。

女性に美德を守らせるといふ聖なる事業に一生をさげたこの老人には偉大なる師匠があった。彼がユスベクに仕

える前のハーレムの去勢奴の長がそれである、この人物は「私の生涯で見た最も厳格な男」で、「絶対的な権力をもてハーレムを治めていた。」女たちの生活は軍隊式である。「二十人ほどの妻や妾は年がら年中、同時に就寝し、同時に起床し、順番に風呂へ入り、我々が彼女たちに合図をするやいなや。上るのであった。」オイチニ、オチニ。「この偉大なる師匠の下で私は指揮というむつかしい技術をおぼえ、鉄の格律にしつけられたのです」と、この師匠を誇らしげに語った。「女の数など私には問題にならぬ。ベルシャ王の女たちの全部でも同様に私は動かせる。自分の忠実な奴隷達がまず女どもを洗脳しないなら、男はどうして女どもの心を虜にすることが出来ようか。」勿論、彼は厳しただけではない。おエンマ様のような浄玻璃の鏡を持っていた。この嘘発見器の鏡の前では、黙秘権などどうにもならない。そんな権利は彼女らには与えられていないのだ。これがベリヤの権力を確立する。「彼は喜んで、ごくつまらない密告にも褒美をやる。彼女たちは通知を受けなければ、夫に近づくことは出来ない」のであるから、去勢奴は自分の望みどおりの女を主人のところへ呼び、主人の目をこちらの願っている女に向けさせる。ところで、「この不平等な待遇は何かのスパイ行為に対する褒美なのだ。」「これがベルシャにおいて、最もよく治められたと、私の考える、ハーレムにおける統治であります。」だから、私をベリヤにして下さいと去勢奴の長はユスベクに求めるのである。ユスベクはこの申出をすぐには受け入れなかった。何故ならこれを受入れることは党書記長が秘密警察と同格になるか、あるいは、秘密警察の傀儡となる危険があるからである。それで彼の妻たちに与えた手紙の六十五は、去勢奴のすゝめるような「兇暴な手段は他の総ての手段を試みた後でなければ、用いることは出来ない。お前たちが私の為を思って行おうと思はなかった事を、お前たち自身の為を思って行え。」「どうか、おこないを改めてくれ。そして、

この次にはお前たちの自由と休息に反して人が私にすゝめる提案を拒否できるように行動してくれ。なぜかという、(ユスベクの本音は)私がお前たちの主人であることをお前たちに忘れさせ、私がお前たちの夫であると考えたい」がためにほかならぬのである。この卑怯な専制君主は、自己の手に一切の権力を握ったまゝ、人民の愛情と、秘密警察の服従をえようと望んでいるのである。彼の友人ネシールに与えた手紙の六には無能で自分勝手な専制君主としての彼の性格がはっきり示されている。

故国をあとにした時、「私の心を最も苦しめているのは、私の妻たちである。彼女たちのことを考えると私は悶々の情にとらわれざるをえない。だが、ネシールよ、それは私が彼女たちを愛しているからではない。この点については私は一種の無感覚になっていて、インポテに近い。私が暮して来た大世帯のハーレムの中で、私は恋を超脱し、恋によって恋を破壊してしまった。だが、私のインポテそのものから、ひそかな嫉妬が生れ、それが私をさいなんでいる。私の眼の前には殆んど気まゝに放任されている一群の女たちがありこの女達に対して責任を持つものとしては卑しい魂の持主たちがいるのみだ。私の奴隷たちがかりに忠実であるとしても、なか／＼安心は出来ないことであろう。忠実でないとする、どうなることだろうか。」彼には搾取を楽しむ能力もなければ、秘密警察の忠誠を信ずる勇氣もない。たゞいつまでも専制君主でありたいと望んでいるだけなのである。一体どこに正義の士の思影があらうか。

御婦人用ハーレム

モンテスキューの中にはアルセストとフィラントが同居する。それが「ベルシャ人の手紙」ではユスベクとリカと

なつて活動し、前者は正義を説き後者は謙讓を説く。両者が調和する時には、自己には厳しく、他人には寛大な君子人となり、均衡が破れると反動的となるか懷疑的、場合に依つてはシニークになる。ユスベクの正義の道德は幾何学精神に発し、リカの謙讓の道德は、人間の弱さ、他人の目で自己を見る相對主義に基いている。

「日々に悪くなっていく世紀に完全を提案すること、非常の悪業の間であつて過失に対し憤激すること、このように高い道德は思辨的に流れ、我々のあるべき所を非常に遠くから示すのは我々がある所を我々の勝手にまかせることになりはしないかと私は恐れる。」(Pensées 89: II 1438) 氣むづかしいユスベクにリカは書き送った。(手紙の百四十四) 私は有名な二人の學者に会つた。一人の意見を要約すると、「私の云つた事は真である、私が云つたのであるから」となり、他方の意見は「私の云わなかつたことは真でない。私が云わなかつたのであるから」というのであつた。前説の方が害が少い、自分の財産を守るだけであるのに対し、後者はすべての人の財産を攻撃するのであるから。両者共に人を不快にして、賞賛を博そうとしているのだが、人に優れようとして、人と對等にもなれないのである。これと比べて謙讓な人々がいかに世の中を楽しんでいるかを説いてユスベクに意見をする。リカはすでに述べたようにハーレム制度には批判的となつていたが、ユスベクに御婦人用ハーレムという物語を書き送つた、これはユスベクに對する痛烈な批判にほかならない。これが手紙の百四十一である。

シナのお方は御婦人室というと婦人を御する室と解し、日本の国有鉄道には変なものがあるといつて笑うそうであるが、こゝに御婦人用ハーレムというのは婦人を御する普通のハーレムではなく、レディーに複数の男性が奉仕するハーレムの事である。相對主義の立場に立つ限り、男性用ハーレムに對して、こんなハーレムも考えられるわけであ

る。博士たちの云うように天国は男性の為にのみ作られているのか、という問に對し、ある聡明なペルシャ婦人が答えた。「それは俗説です。女性の地位を下げる為には人々はどんなことでもやっています。ユダヤ民族というペルシャ全土に拡っている民族などは女には魂が無いと主張しさえもしていますものね、」このような説はことごとく男性の傲慢をその起源としている。有徳な男性が死ねば八頭身の天女たちに取巻かれて、その光景を見ることが出来れば、誰でも天国行を待ちきれずに自殺したくなるほどだというのが事実なら有徳な婦人が死んだ場合には、ハンサムな天使達の閉じ込めてある専用のハーレムが与えられ、その番人としては女ではチョン切りようがないから男性の去勢奴がいるはずである。

「あるアラビヤの本で読んだ事ですが」とこの婦人がつけ加えた。昔イブラヒムという我慢のできないほどの甚助野郎で、横暴な男がいた。彼には十二人の妻があつたが非常にそれを虐待した。ある日、妻達の中で勇敢なのが彼を批難した。「人を恐れさせる手段を非常に強く求めると、その前に必ず人から厭はれる手段を見出すものです。私達は非常に不幸で、何かの変化を求めざるを得なくなりました。他の人が私の立場に立てば、あなたの死を願う事でしょう。だが、私は私の死を願うだけです。しかも、それ以外には貴方と別れることを望みえないのですから、そうしてお別れすることは一層楽しいことでしょう。」イブラヒムは怒って彼女の胸に短剣を突きさした。「天が私の徳をあわれんで下さるならば、あなた方の仇をうってあげますよ。」と、他の女たちに云った後、あの世に去った。

以下、有徳な女性アナイスの天国における楽しい生活の描写となる。美しく忠実な天使の二人掛けて「若しも私が自分の不滅を確信しないとすれば、今にも死ぬよと思うでしょう」というほどのサービスをたえず受けたのである。

「至福者は非常に生き生きとした快樂をもっているので、いわゆる精神の自由を享有しうることはまれである。そのため現実の事物に否応なしに執着して、過去の事物を全く忘れ、浮世で知った、または、愛したものに對して、もはや何らの関心も持たないのである。」ところがアナイスは、シャバで閉じ込められた生活をしていたので、黙想にその時間をさゝげ、哲学的な精神を持っていたので、娑婆の不幸な女性の運命と天国における自己の生活を比較する余裕があった。元來親切な女性なので、地上のハレームの女性たちに同情するだけでなく、彼女たちを救ってやりたくなつた。それで彼女をめぐる五十人の天使の一人に指令を与えた。イブラヒムの姿になれ、彼のハレームに行け、それを占領せよ、そこから彼を追放し、次の指令があるまでイブラヒムの地位につけ。指令は迅速に執行された。イブラヒムの姿を借りたデボ天使は相手の不在中にハレームに行き、途中で盗んだ鍵を使って、不幸なすべての妻を満足させた。その現実性をもっと少なければ彼女達は夢だと思つた程である。間もなく本物のイブラヒムが帰つて来たが、番人の去勢奴は彼を相手にしない、最後の手段として妻達にどちらが本物かを裁かせたが、一時間で天使はその実力によって女達を幸福にしてしまったので、もし天使が彼の命を助けてやれと云わなかつたとすれば、イブラヒムは自分の妻達にぶち殺されてしまつたであらう。

彼女達は云つた。「あなたはイブラヒムに似ていません。」すると、天使は、「なぜあのイカサマ野郎が私に似ていないと云わないのですか、あなた方の夫になるために私のやっていることは足りないのでしょうか。」「いいえ、あなたはたった一日で彼が十年かかった以上にイブラヒムになりました」と異口同音に答えるのであつた。

本物のイブラヒムが又やつて来た。天使は彼をつかまえて、十億円使つて犬をすてるように、地の果に彼を捨てに

いった。その間、妻たちは恋しさにたえかねた。去勢奴は昔ながらの厳格さをとり戻した、女たちは涙に暮れた。だが、再び帰って来た天使は、人類の半分を幸福にするために天が与えた極めて平和的な攻撃兵器をチョン切られた人々を解放し、ハーレムに誰でも来られるようにした。女たちがヴェールをつけることも許さなかった。その間、彼は葦助の財産を惜しみなく費しながら、夫の義務を尽したので、三年後にイブラヒムが南極から帰った時には、妻たちと三十六人の子供しか残っていなかった。

だが、リカの与えた御婦人用ハーレムと解放されたハーレムの物語も正義に狂ったユスベクには、何の効果もなかった。彼は自分の権利にますます執着して、次第に破局に近づいて行く。

自然の復讐

親友リカの与えた御婦人用ハーレムの物語もユスベクとその妻たちを破局から救う事は出来なかった。自然の力に押されてユクベスのハーレムは次第にゆれ動いて行く。老いた去勢奴の長は、寺院でヴェールを取落し、顔を人々に見られた女、女奴隷の一人と寝た女、偶然発見された宛名のない手紙、ハーレムの庭から逃げ出した少年などの事件を報告して主人の指令を求める。(手紙の百四十七) この時初めてユスベクは、先に去勢奴の長が求めたもの「ハーレム全体に対する無制限の権力」を興えることを決心する(手紙の百四十八) その直後、去勢奴の長が死に、間抜けな老奴隷が臨時に去勢奴の長となる。このチャンスを利用して女たちはますます大胆になり、奴隷を買収して男をハーレムに入れる。この混乱状態を主人に訴えて、死んだ去勢奴の長の地位を望んだソリムに対し、「私はお前の手に劔を渡

す。お前に私が現在この世で持っている最も貴重なものをあげける、それは私の復讐だ。」とユスベクは血の肅清を命令する。

この間ユスベクの心は、どうであろうか。彼はその悶々の情をネシルに訴える（手紙の百五十五）「楽しいおだやかな生活の値打をよく知っていて、家庭の中にその心を休め、自分に生を与えた土地しか知らぬ者は幸なるかな。」ユスベクはすでにヨーロッパの生活に堪えられなくなっているのである。彼は友人リカをうながして故郷に帰ろうと云うのだが、相手はなか／＼お神輿をあげようとしめない。また、故郷に帰ったらどういうことが起るか。ユスベクは正義の士として故郷に容れられず、自ら亡命したのであるから、故郷に帰ることは自ら首を敵にゆだねると同様である、だが、ハーレムが乱れている以上は、男の意地として、命をかけても帰らねばならぬ。おれは国へ帰る。あゝ、人間の自然に反してチョン切られたオシヤカ野郎め「恋のあらゆる感情から永久に閉ざされた卑しい奴隷どもめ、貴様達は私の立場の不幸を知ったらば、貴様達の立場をもはや嘆かなくなるであろう。」

かくして、秘密警察はその全能力を發揮する。女たちはユスベクに対して今は厭悪以外を感じない。自分自身と夫の死を、ひたすら懇い願うのみである。（手紙の百六十二、百六十三）ところが、ユスベクを本当に裏切った女は、彼が心から愛し、特別に目をかけていたログザニスであった。彼女の徳性については卑しい奴隷達さえも疑っていなかったのに、ある日、新らしい去勢奴の長は彼女が一青年の腕に抱かれているのを見た。たちまち、空襲警報、続いてチャンバラ。すでに肉体的エネルギーを愛人に放出しつくした青年は、精神的エネルギーのみで、多数の奴隷を倒したのち、愛人の前で息を引取る。

ログザーヌは毒薬を飲んで男の後を追うのだが、愛人の血を流した奴隷達をあの世へ先行させる。「ベルシャ人の手紙」の最後の手紙が彼女からユスベクに送った百六十一である。流通の正義は等価交換の関係であるごとく、自然の要求する男女関係も等価交換であるべきだとするならば、ユスベクは当然自然の復讐を受けるべきなのである。それがこのベルシャ女の主張である。

私は「夫をあざむいた、その去勢奴たちを買収し、夫の嫉妬心をもてあそび、夫のぞっとするようなすさまじいハーレムを歓喜と快楽の場所に変えることが出来た。」ユスベクにそれを批難する権利があるか。「私があなたのきまぐれを讚美するためにのみこの世に存在するのだと信じたり、あなたが何でも勝手なまねをしている間、私のすべての欲望をしいたげる権利をあなたがもっているのだと信じたりするほど私が軽信的だと、どうしてあなたは考えたのですか。それは大まちがいです。私は奴隷状態に暮したかも知れませんが、いつも自由でした。私は貴方の立てた法を自然の法に従って作り直しました、だから、私の精神はいつも独立の中にあつたのです。」それなのにユスベクは彼女を最後まで貞女だと信じていた。「我々は二人共幸福でした。あなたは私をあざむかれていると信じていたし、私はあなたをあざむいていたから。」

トログロデイト族の滅亡と興隆

ミルザはその友ユスベクに手紙を送り「昨日、人間は快楽と感覚器官の満足によって幸福になるか、それとも徳行の実践によって幸福になるのが、問題になった。私がしばしば君から聞いたところでは、人間は有徳であるために

生まれたのであり正義は存在と同じくらい人間に個有な性質であるそうなる。どうか、君の意見を説明してくれたまえ。」(手紙の十)と述べている。この問を社会生活をする人間は、正義に従わずして幸福でありうるかという意味に解釈して、「君は私の理性をためす為に、君の理性を放棄しているのだ」と前置きして述べたのが、正義の人ユスベクのトログロイト族の歴史(手紙の十一、十四)である。かくて我々は社会と正義の問題に接するわけである。

トログロディト族とは、洞窟の住民の意で、紅海に沿って住んでいたと伝えられる。「ベルシャ人の手紙」によれば、この小民族は一度滅亡して、再び復活したのである。まず旧トログロディト族の歴史を調べよう。

彼等は「人間よりも獣に近かった。」それは外貌によるのではなくて、「彼等の間には何ら公正や正義の原理がないほど、邪悪で残忍であった」からである。始め王政をもっていたが、国王が彼等の邪悪さを匡正しようとしたので、これを殺して共和制を採用したが、執政者たちを選ぶと間もなく、わずらわしくなり、全部虐殺してしまった。新しくびきから自由になった彼等は全員一致で、「もはや誰にも服従しない。各人は専ら自己の利益に注意し、他人の利益を念頭におかない。」と決議し、後世マクス・スチルナーが唱えた無政府個人主義者になり、各人自分の畑を自分で養うに必要なだけ耕すことになった。ある年は早魃であった。高地の住民は凶作で、低地のそれは豊作であった。だが後者は収穫を分けてやらなかったたので、前者は殆んど飢え死にした。翌年は雨が多く、高地では神武以来の豊作にうかれていたのに、低地は洪水で畑を流された。民族の半数は飢を訴えたが、自分達が昨年冷酷であったと同じ程度に冷酷な同朋を発見しただけであった。

女房を取られた男が、共和政時代に中労委をやっていた人に調定を依頼したが、その人は自分の畑を耕すのが忙し

いのに、他人の紛争に暇を裂く事は出来ないと言つて断つた。断わられた男は仕方がないので、中労委さんの女房を播払つた。二人で仲間を組んで他人の土地を奪つた連中の一人は、収獲物を分配するのが惜しさに仲間を殺したが、他の二人組に殺されて、奪つた土地を取られてしまう。こんな事件が行われている時に、ひどい疫病が流行しだした。隣国から来た名医が病人達に投薬して、なおしてやつた。疫病が治つた時、医者は治療を請求に歩いたが、誰も支払ってくれず、多勢の命を助けたために、危うく飢え死にするところであつた。だが間もなく同じ疫病が更にはげしい勢で流行しだした。今度はトログロデイト達は医者のを待ってはず、迎えにでかけたのだが……。」「くたばつてしまえ。不正な人々よ。君たちの魂の中には、君たちがなおしてもらいたいと思つている毒よりも、命取りの毒がある。君達はこの世に場所を占める値打ちがない、人情というものを持っていないのだから、また、公正の規則を知らないのだから。もしも神々が君達を罰しているのに、私がかれらの怒の正義に反対するとすれば、私は神々にそむいたと思うであらうに。」このようにトログロデイトは「彼等の邪悪自体により亡び、彼等自身の不正の犠牲となつた。」つまり正義の存在しないところには社会は成立しえないのである。

この邪悪な民族の中に不思議な二家族があつた。彼等は正直者は馬鹿を見るにもかゝらずヨシダ、アシダをにくみ、正義を知つていた。徳行を愛していた。彼等は最も辺鄙な土地に、同朋と遠ざかつて暮していたためにか生き残り、その子孫が新しいトログロデイト族を形成することになる。彼等はその注意の全部を子供の道徳教育に注いだ。「個人の利益は常に共同の利益の中にある。共同利益から離れようと思ふことは、身を亡ぼそうと思ふ事だ、徳行は我々の負担になるはずのものではない、それを苦痛な修業と見なすべきではない、他人に対する正義は自分に対する善行

である。

二宮金次郎とワシントンの両家の子孫は教育と模範のおかげで大いに蕃殖した。「これらトログロデイトの幸福を誰がこゝに云い現わすことができようか。これ程正しい民族は神々から慈しまれるのが当然であった。」ここで我々は神様に御登場を願うわけであるが、彼(?)はモンテスキューの自然法理論においては、後に述べる如く極めて重要な役割を演じるのであるから、よろしく御注目ねがいたい。新トリログデイト族の目が開いて神々を認めるようになるや、神々を恐れ畏こむようになり、やがて宗教が習俗の中に、自然がそこに残した余りに荒々しいものを柔らげた。この辺からモンテスキューの自然宗教論、ロマンチズムが展開される。人々は神々のためにお祭りを行う。青年男女は八木節を踊り、その後は宴会となるが、ここでは、「歓喜が質素に劣らず支配していた。」だから密造酒で炭坑節を歌うのではなく、牧歌的な楽しみで行われる。このような事情は速いものを近くして若い男女が結ばれ、その結合は両親の同意によって確認される。人々は神々のお恵みを求めにお寺詣りをするが、それは徴兵をのがれるために大師様にゴマをたくとか、権大僧正になるために身延に献金するものではなかった。「かゝる祈願は幸福なトログロデイト族にふさわしからぬことであった。彼等は同朋のために神助を願うことしか知らなかった。」「自然は彼等の欲求も欲望も充していた」から、貪欲というものは知られていなかった。彼等は互に贈物をしたが、それはジェット機を売込むためではなく、自分のあまっているものを、友が不足していることを発見したためであった。しかも与えた者は必ず利益をえたと信じていたのである。

こんなに幸福な民族は繁栄せざるを得ない。すると不正で貧乏な近所の民族達が相談して彼等の富を奪おうとする。

この計画を聞き知ったトログロデイト族は早速使者を送って、皆さん方の必要なものは差上げますが、我々の土地に敵として入り込めば、我々は貴方がたを不正な民族と認め、猛獣としてあつかいますと、主張した。この正しい主張を彼等はあざ笑ひ、憲法で戦争放棄したはずのトログロデイトなど、一押しすれば押しつぶせると思つて攻めよせた。トログロデイトは驚いたが、それは彼等の不正に対してであつて、彼等の武力に対してはなかつた。驚ろきはやがて敵愾心、特攻精神に代つた。不正と徳行との戦いの結果は明らかである。非戦闘員の腕時計を奪ふことゝ、強姦することしか目的としていなかつた奴隷兵は、退却することを恥しいと思わなかつたからである。

人口と領土がある程度まで大になれば、王政をとらなければならなくなると「法の精神」は云つている。それでトログロデイト族も国王を選んで、最も正しい人間に王冠を捧げようとした。その年齢と長い徳行によつて敬愛される老人に、代議士達が選挙の結果を知らせた時、彼は「生れた時には自由なトログロデイト族を見たのに、今日彼等が隷属するのを見て、私は悲痛の為に死ぬであろう」と云つた。トログロデイト族にとつて徳行は重荷になつて来たのだ。だから「あなたがたは君主に従属し、あなた方の習俗よりも厳しくない、彼の法律に従ふことの方を好んでいゝ。王政下では「大きな犯罪におちいることを避けさえすれば、徳行を必要としない」で、快樂にふけることが出来る」とあなたがたは思つている。だがいづれは警職法の改正を必要とするようになるだろうと云つてこの有徳な老人はワット泣き伏した。こゝでこの物語は終つてゐるのである。

結びに代えて

自然法と正・不正の区別に関する試論

— Essai touchant les lois naturelles et la distinction du juste et de l'injuste —

モンテスキューは「人間の義務」についての名著を計画していた。その一部分は一七二九年五月一日、ボルドーのアカデミーで講演され、それをアカデミーが「義務論の分析」として要約している。だが田舎の学会が作った要約だとか、週刊誌の映画の梗概など、云うものは、実物の評価には余り役立たないものである。それよりもマツソン版の全集に掲っている「自然法試論」は、その第三巻の一七五頁から一九九頁までを占めるまとまった論文であるから、これが果してモンテスキューの作であれば、これによって彼の正義論を知ることが出来るというものである。

ところが、この論文はボルドー市の古文書館に見出されたものではあるが、それまでに数奇な運命をたどっている。この論文の存在を最初に指摘したのは、サン・ペテルスブルグ図書館のフランス語写本のカタログ作成に発遣されたギュスターヴ、ベルトランである。ところがこの論文の複写をボルドーの古文書館に送ったオヴァン・ド・トランシエールの云うところでは、これは大革命の時、ロシア人Z氏かD氏が行った（後にロシア政府に売却された）蒐集の中にあったというが、ベルトランのカタログ中のZおよびD蒐集にはこの論文が見出されないという。そのようなわけでこの論文がモンテスキューのものだという証拠は、「義務論の分析」とその構想が似ているという以外にはないのである。しかも似ている点が、義務を一、自分自身に対するもの、二、神に対するもの、三、隣人に対するもの、四、人類に対するものの区分にあるとすれば、これは少しも独創的なものではなく、キケロやブーヘンドルフを踏襲したにすぎず、モンテスキュー独自のものと断定する根拠は少しもないのである。

このようなわけで、この論文が果してモンテスキューのものかどうか疑問の余地が大いにあるので、「ふりだし」にすべきものを「むすび」に代えて、その概要を示し、今まで述べて来たところと照し合せて、モンテスキューの正義論の決定を讀者自身に委ねたいと思ふのである。

次にこの論文が特に筆者の興味をひいたのは、モンテスキューの道德論としてほかにまとまったものがないということの外に、この論文は「ベルシャ人の手紙」とくに、「トログロデイト族の物語」に深い関係があるためである。ポルドーの古文所保管所にあるこの論文の複写は、一九頁のボール紙装丁ノートブックの形であり、筆者は終りに一八七七年五月とするし、次のような註をつけ加えているそうである。「註—原稿は『ベルシャ人の手紙』の色々な抜萃、なかんづく、手紙の二、十二、十三、十四の抜萃でおわっている。」

手紙の二はユスベクから去勢奴の長に送ったものであり、主人の不在中、よくハーレムの番をせよと命じ、おれの恩を忘れるなど云った後、女たちの探縦法を示したものである。これが道德、正義の見本であるわけがなく、その反對物であろうと思はれるから、これを抜萃した人の意図はそこにあるのであろう。手紙の十二、十三、十四は全部トログロデイト物語に属し、道德なかんづく正義が如何に社会生活に必要であるかを主張したものである。

「全智全能の神が存在する」とすれば、我々の存在が神に依存するのみならず、我々の行為も神々に依存するのではないか、つまり、自然宗教の名の下に示された義務を遂行しなければならぬかどうかの問題が生じる。我々の理性は神の意志を示す仲介者であり、その示したものが自然法である。この法に適ったものが善であり、正であり、この法に反するものが不正であり悪である。徳行とはこの法が命ずることを実践する習性であり、悪徳とはそれに反する

習性である。

「法を作るための要件」としては、命令する上位者と、彼に服従する下位者があり、前者は人に恐れられるだけの力があるが公正で、下位者に対して善意に満ちており、後者は賞や罰を受ける能力がなければならない。全能の神と理性的動物たる人間はこの要件を充している。神の英知の立場から見ると、あらゆる創造物が目的を持っているのに、神の傑作たる人間がその気まぐれにまかされている筈がなく、その行為の規範となるべき法がある筈である。

次に「人間の自然から考えて見ても、人間が単に感覺的、動物的に生きるために作られたのだとすれば、理性や、精神的諸能力が与えられていることは全く無意味となる。それだけでなく、人間が神から与えられた長所を乱用することが許されているとすれば、大変な事になる。情念は、それ自体において考察すれば、自己保存に役立ち、有用なもの、探究を鼓舞するが、法が有力な障壁を作っていない限り、この世の中に大きな混乱をまき起すであらう。

「個別的な法とそれを見出す通常の仕方について」考えて見る。全体は部分より大きいとか、二つのものは、その各々が第三のものと等しければ、それ／＼相等しいという幾何学的真理と同じように、約束を守れ、恩を忘れるな、己の欲せざるところを人に施すことなかれという道徳的格率は自明の理であると人は云う。しかし、全体は部分より大きいという命題を否定するには全体及び部分という觀念をくつがえさなければ、自己矛盾に陥るに反し、約束を守れという格率を否定しても自己矛盾に陥ることはない。この格率が真であるというのは、それが適法であり、神の意志であるということの意味するだけである。さらに、道徳の格率には例外がある。約束を守れといっても、あづかった刀を狂人に返してはならない。また、格率には幾何的公理のような判明はない。我々が自明と思う格率を民族全体

が認めない場合もあり、恩を忘れるなということが正しいとすると、恨を返すのは不正であるかという問題が生じる。食人種に人を殺して食うのは不正であり、それを知るためには反省して心の中にそれを禁ずる法を見出せといっても駄目である。模範や教育が彼の自然的印象を消し去っているから。

「神の善なることより、導き出される道徳の一般的原則。」法の必要が、人々のそこに見出す利益に依って知られるとすると、神のように賢明で、善良で、公正な立法者は、人々の幸福と保全以外の目的を持ち得ないことは明らかである。この原理を基礎として、我々は自然法を探究する三つの方式を得ることが出来る。

「自然法を探究する真の方式」幸福であるために人間は何をなすべきかということ、神は人間の幸福と、人間の保全を望みたまうと云うことから、この目的にかなうすべての格率は自然法であるということになる。これらの格率は、(1)我々自身に関するもの、(2)神に関するもの、(3)隣人に関するもの、に分けることが出来る。道徳を自己と社会との関係だけについて考へる廿世紀の人間にとっては、自分自身に対する格率というのは奇妙に感じられるが、「自己に対する愛」は我々の行動の「第一の、より正しくいえば、唯一の動機」であるという立場からは養生訓、腹八分目の教へは単に処世訓ではなく、道徳の対象となりうるし、この立場を無視するとモンテーニュやモンテスキューの何気なく述べている文章の意味を理解し損ねるであろう。神との関係における格率も、我々自身に対する愛との関係で考察される。神が全智全能で、我々の幸福を望んでいるとすれば、これを愛し、かしこむのは当然である。隣人との関係の格率も、我々自身の保全に彼等が必要であるのだから、我々も彼等を助けねばならぬというように、自己愛によって説明出来る。したがって我と他人の関係は、平等な相互主義に立つべきものであって、「人間の間に見出される

この種の均衡から、正義と公正の共通の觀念が生れる」のである。「人が自分にしてくれるように我々が望んでいることを、他人に対しても同じように行なえ。」この正義の格率が他のすべての格率を内包する。

次に「これらの格率の不遵奉から生ずる害悪」と題して、この論文は、旧トログロデイト族の社会の混乱、崩壊について述べたと同様の事を述べている。これにより、人間は道徳なしには存続しえないことが、解るのであるが、これだけではその格率を法とするには充分でない。自己愛が我々に与える忠告は、医者が健康について与える忠告と同じく、たゞちに法とはならない。道徳の格率が法の効力をもつためには、我々の行為に対し我々が責任を持たねばならぬ上位者の意志がそこになければならぬ。つまり神の意志によってそれらの格率は法となるのである。

「一般に、我々が以上見たところのすべての格率は、このようにして、それと同じだけの法となり我々が義務づける。そしてそれに反するすべての行為は正あるいは不正の名をうる。」(注、これは明らかに脱落か、誤植かが、原文か、マツソン版に、恐らくは後者にあるのであろう。すなわち、*Toute action qui leur est contraire prend la qualité de justice ou injustice* は *qui leur est conforme ou contraire* でなければならぬ。従って、日本文も「それに一致する、または、反するすべての行為」となるべきであらう。)しかし、神がこれらの法を与えても、神の意を損ねる恐れがこれらの法を守るように勧告せぬとすれば、無駄であるから、神は我々が彼を畏れかしこむ事を望まれるのである。それは神が我々の忠誠を必要とするからではなく、我々をよりよく彼に服従するよう決意させんが為である。この動因こそ最も重要なものであり、最大多数の救済、または利益のために自己の個別的利益を放棄する場合、それを決意せしめることを可能ならしめる唯一の動因である。かくて私は神の法は各人に同じ義務を課し、それが私を除外することをどこにも

見出さぬのである。「正、不正の限界を示す仕事は法にあり、最高の立法者の気をそこねないようにすることは私の仕事なのである。」

以上で、モンテスキューの「自然法と正と不正の区別についての試論」は大略終ったのであるが、なお彼は、「自然法を見出す第二の方法」として、神が人間を社会生活をするように作られたことを挙げ、社会生活の利益、それが法なしには存在しえないことから、社会の基礎となる法は自然法であると述べ「我々の義務を発見するための第三の方法」として自然が機械的に一定の行為をしようという気になるように我々を作った事を論じ、「本能の宗教」を唱えている。この点を強調するとモンテスキューは案外ルソーや、ベルナルダン・ド・サンピエールなどに近いところもあることが解るであろう。

以上、我々が見た論文は、要するに自己愛が人間行為の総ての動機であり、自然が我々に与える格率はこの自己愛と一致するものである。しかしそれらの格率に法の強制力を与えるには神の存在が前提とされるという功利主義である。人間のあらゆる行為の動機を自己愛に還元することは、ラ・ロシュフーコーなどモラリストが行った。しかしそれはベッシミスムの立場からであり、自己愛の生産性を肯定するものではなかった。この論文は自己愛を人間行動のすべての動機と見る点で、ラ・ロシュフーコーに一致するが、その生産性を強調する点で、これと相離れるものであり、生産性を強調する点で、エルヴェシウスたち感覚論的功利主義と一致するが、道徳の強制力を神に求める点で、これと一線を画している。結局、ラ・ロシュフーコーからエルヴェシウス、彼を祖述、俗化したイギリスのベンタムへの橋渡しをする学説といえよう。

ところで、もしこの論文が間違いなく、モンテスキューの作品であるとすると大変な問題が起つて来る。「法の精神」の第二章が極めて簡単であることは従来モンテスキューは形而上学がきらいである、自然法というような抽象的問題には興味がない、神や自然を認めたのは、学説を展開するための便法にすぎないと考えられていた。例へば、あちらの生徒学生用に編纂された「クラシク・ラルース」の「法の精神抜萃」の「第二章自然法について」には、わざわざ註をつけて「モンテスキューはルソーと同じように、社会状態以前の「自然状態」を認めている。しかし、それは主として彼の証明の便宜のためである」と片付けている。ところがもしこの論文が本物だとすると、この注釈はある日本のある大学者が「黒人奴隸制について」に対し、モンテスキューの「驚くべき偏見」を論じた注釈と同様、世の笑いの種となりかねないのである。それだけでなく、法は自然に従うべきものか、風土その他の物理的原因によって決定されるものかという「法の精神」の根本問題の重心がどの辺にかゝっているかという点について従来の解釈が大きな変更をうけなければならなくなるかも知れない。

このような重大な問題をかゝえたまゝ、すなわちむすびにかえた柿の種を呈出したまゝで、この論文を終る。どのような芽が出て、実がなるかはカニの子が教えるであらう。